EBE-KID(旧題：日本の仏教弾圧)

松山義人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＥＢＥ－ＫＩＤ（旧題：日本の仏教弾圧）

【Ｎコード】
Ｎ８４５５Ｋ

【作者名】
松山義人

【あらすじ】
母親は新興宗教に熱中していた。近所には美しい夫人が暮らしていた。

第1話　ギルバートの憂鬱

空高く天晏を流浪する羽雲を少年が眺める。

カラーテレビと冷蔵庫と洗濯機が出揃い、安保條約絡みの騒ぎが終結した。
三面記事の内容は坦々とした内容に移り、国体や誰彼の思想は己の物であるとは誰も彼(か)れも考えたり、語り合わなくなった。「悪人とは只、己あるのみ」という風に国民達は考えるように変化した。

濡れ縁に座した6歳の木戸健一は夕餉の刻を待ち侘びている。
母親の奈美江が世話をした菜園の碧色の甘藍(キャベツ)は、シロチョウの子から奪われて崩れかけている。

近場の賃貸コーポに蟄居するギルバート老人――木戸健一の遠縁である――何時でもメディアの中傷を言ったり、休日に河川敷へ出向いてバグパイプでスコットランド民謡を奏(そう)じて山羊(やぎ)達に対して聴かせたり、商店街へ出向いて肉屋の主人に対して『霊魂の実在』や『愛』についてる講(こう)じる事が趣味である。

ギルバート老人の戦友であるジョンソン伯爵の実家で経営する企業の得意先が戦後に資産の没収を受けている。
白色テロの組織より資金を援助を受けたジョンソン伯爵の書いた雑誌論文に対して呼応するギルバート老人は今宵は酒田夫人の家の夕食会へ招待を受けている。
ギルバート老人は酒田夫人が書店で購入した危険な書物の内容つい

て数々の忠告を行った。

ギルバート老人が酒田夫人に対して無駄遣いを嗜めているのだと6歳の木戸健一は解釈をした。

木戸健一の母親である奈美江は酒田夫人の催(もよお)す月一の料理の講習会へ通うので面識を持つ。

竹竿に干された化繊(ポリエステル)の奈美江のブラウスと健一の襯衣(シャツ)は、東風を受けて干涸(ひから)びていた。草花と赤土の間から色鮮やかな光彩が映じている。

庫裏に居る木戸奈美江は、親戚から送られた山菜を重曹で灰汁(あく)抜きを行う。

リチウム塩を薬箱に収める木戸奈美江は、服用して苛苛を収めている。

遅遅(ちち)とした春色の粒子が散じる赤濁をした暮色の中、哨吶(チャルメラ)を鳴らす屋台のラーメン屋に人々が集まっている。

翌日は不思議な事件が起きた。

幼稚園からの帰途。住宅街の路地の金薄(すすき)が群生する奥裏に、水道管が放置された空き地がある。翌日、その場所へ向かうと木造の校舎が建っている。

木造校舎へ通学する女学生たちは脹(ふく)らかな洋袴を穿(は)いている。

山波の様に立ち竝(なら)び、整列する児童たちは、体躯を一斉に屈伸をしたり、伸長させた。

通常と振り付けが異なり、伴奏の音楽は鋼石ラジオが使用される。二人組の女子児童は、大の仲良しの様子である。一人の少女の名前はマーガレット、もう一人の少女は、何処かで見覚えがある。

英雄たちの崇高さについて宣撫を行う教員たちの尖叫は、抑揚し過ぎる。

――己(こ)も未来は、此の学校の児童になるのである。

木戸健一は帰宅した。

只(さて)説、板廊下を渡り歩き、襖戸(ふすま)を開いた。

仏壇と真空管テレビが置かれる畳部屋の様子を眺めた。別の部屋ではトランジスタテレビが置かれる。

真鍮(しんちゅう)で装飾された仏壇の上は、白磁のマリヤ像が仏像の横に並び立つ。

硝子戸(がらす)の彼処に佇む金木犀の翠葉は、東の風で揺れていた。

砂壁に掛けた先祖たちの黒縁の遺影は神秘的に映じる。

軍服を纏(まと)う祖父の遺影の彼方を眺望する――――洋々とした山吹色の野菜畑、――瞳の中に針葉樹林の立ち並ぶ湿地帯の風致が映じる。

湿地帯を北進する草藪に往来するトナカイが餌場を探し求める。
粉雪(こなゆき)が降る中、逍遥とする人々の語り合う文法と発音は理解出来ぬ内容である。

開口された硝子戸(がらす)から陰風が薄暗い畳部屋へながれこむ。

突如――。
漆塗りの観音開きの中から、メアリー夫人の肢体が出現した。
木戸健一の姿に気付いたメアリー夫人は”○○○○”と罵り、窓口を越えて”颼［シューッ］”と大空の雲の上まで昇天した。

――翌日、木戸健一は酒田夫人の邸宅を訪問した。

蔦蔓の絡むアーチ門を潜ると二階建ての色漆喰の壁の洋館へ辿り着いた。

「健一くん、いらっしゃい。また、メアリー夫人が来たんですってね」

微笑んで勝手口から応対する酒田夫人は、木戸健一を厨房へ案内した。

重曹が使用された凝乳(クリーム)の西洋菓子を馳走になった。

自宅では卓袱(ちゃぶ)台の横に正坐をして食事を取るが、酒田家の白塗りの卓子は椅子が付いている。
板張りの応接間に仕切られた天鵞絨(ビロード)のカーテンへ鉛硝子のシャンデ

リアが白い影を映じる。

酒田夫人の着る灰殻（ハイカラ）なカシミヤのカーディガンから二つの乳房や、デニムのジーンズから陰毛が透けて見える。

千里眼である木戸健一の瞳は女性の裸体のみならず月の裏側まで覗く事が出来る。

酒田夫人の実父の富田一郎は終戦後に台湾から引き揚げ、知人たちは白色テロ事件の後に、消息不明になっている。

酒田夫人は信心や宗教に対して一般的な戦後のヒステリックな偏見を持たない。

だが、彼女の様な女性でも、キリスト教に対して涙もろい一面を持つ。

五人組の組頭であるハワード夫妻は、酒田夫人に対して警察署へ密告したが陰謀が発覚して各地で村八分を受けている。

酒田夫人の所有する台湾時代の写真アルバムのセピア色の写真は、赤濁している。

――毛沢東も蒋介石も双方、ゲルマン民族を奉じて、双方共、ドイツ社会党と懇意である。

成文法であるドイツ法を基準にした法律が制定されているが、選択の自由が著しく制限を受けている。

一方、我が国の帝国陸軍は右翼も左翼も双方、フランスの政治家と結託していた。
それ故、フランス人の横暴について現在の与党である日本社会党には勿論、筒抜けである。

共産主義者即ちフランスの仲間という図式は我が国では「誤解」であり「デマゴーグ」である。その理由は、ソビエト連邦の共産主義と決裂したからである。

知識人階級の間では、日本社会党とドイツ社会党との間の甘い蜜月について否定する演技を装い、優越意識を誇る。

酒田夫人が木戸健一の母親である奈美江を疎んじていると、悟った息子の健一は、色々と案じていた。
料理や意匠（デザイン）に精通する酒田夫人に対して頭が上がらぬ女性は数多い。インテリゲンチャである酒田夫人の視点で、巷の女子如き誰でも馬鹿げた妄想を夢見ている様子に見えていたのである。

夜半、母親の奈美江と一緒に、近場の湯屋（銭湯）へ外出をした。
番台で受付をして陶タイルの床畳に入るとプラスチックの洗面器の音が一面に反射していた。
湯煙の彼処に青ペンキ塗りの富士山。

ギルバート老人が湯船の外で糸瓜(ヘチマ)で行水して精悍な体躯がミセルに包まれている。

湯船で暫(しばら)く潜水すると気血が昇ってきた。

湯船から上がって蛇口の上に取り付けてあるタイル壁の平鏡は白濁していた。

健一は何事かを喋った。

「おい」　糸瓜(ヘチマ)で身体を研磨するギルバート老人が健一を呼ぶ。

「木戸さんとこの坊主。鏡と何を喋っていたのだ？」

丸裸で立ち上がってギルバート老人に対して　「――」と答えた。

その話を聞いたギルバート老人は瞿然として脱衣所へ向かった。

浴室を出た健一も、脱衣所の浴袍(バスタオル)で身体を拭く。

釦(ボタン)を嵌(は)めて襯衣(シャツ)を着て頭髪は筒型のドライヤーで乾燥させた。

銭湯を出て帰途についた奈美枝と健一の二人が逍遥する住宅街の夜天は朧朧(もうろう)とした白月と乙女座が煌いた。

白熱燈で銀白色に映じた土瀝青(アスファルト)の夜道、ブロック塀の上で煌々とした矮小な閃光。

エジプトのスフィンクスの形態を取る猫へである。接近すると跳舞してブロック塀の彼方側へ、白銀色の花の咲く柿の枝へ跳舞。

淋漓として湿気の残る髪の毛は夜風で乾いてきた。

石橋の近くの川沿いの道を通過。

それ程、大きな河川ではないけど水深が深い。

暗い澱みがある。この滔滔(とうとう)とした流れには何かが痞えている。
小鼻に突然、芬芬(ふんふん)と臭い水の匂いの感覚が入った。
背後から頭髪をひっぱられた。
杳杳とした夜道を振り向くと多人の気配は無し。

帰宅すると奈美枝は夕餉を出してステンレスの流し台で片付けを始めた。
ドーナツ型の螢光燈の周辺を蟲が飛転している。

銀白色のスプーンで夕餉を頂く健一は、トランジスタテレビの歌番組のフォークソングを聴いた。
アニメを見る為にダイヤル式のチャンネルを回転するとフォーク好きの奈美江が止めた。

近所の井戸端会議においては、奈美枝の趣味について

「派手好き女、ヒステリー女はグループサウンズやフォークソングなんて連合赤軍じみた騒々しい音楽が好きなんだよ。いい年して」
――と評価された。

魯迅たちの革命の魂魄の破片が黄砂と共に我が国まで飛来する事まで憎まれた。その場合、大陸人たちは肉体のみならずコーラン程度の内容を恰も儒教のように我々に語りかけた。彼らの魂魄の支柱である「天帝」の為である。語りかける手段として話は書物という方法「も」あると言うが、この時代はそれだったのだ。

若者たちも冥夜の都邑(とゆう)へ飛来してゴーゴー喫茶で羽を広げた。
公害、刹那的な氣分に浮かれた。

TRIO(ケンウッド)の大型ステレオでイギリス人のビートルズのレコードを流すと上機嫌に変る奈美枝を見る事は健一にとっても幸せな事であり、健一もビートルズが好きになった。
ベトナム戦争は有色人種が親しんだ拍子に対する流行を生んだ。
良き旋律とは云々、と古代ギリシャに由来する理屈は忌み嫌われていた。

現在、我が国の与党である日本社会党は古代ギリシャより古代ローマ、アテナイよりもスパルタに対して惹かれている。
日本社会党は常にイギリス人と趣向を同様にした。
イギリスにはビートルズがいた。

玄関口の黒電話が鳴った。電話には奈美枝が出た。
電話の相手は先だって湯屋で健一と会話をしたギルバート老人である。
螺旋(らせん)巻きの受話器の線を奈美枝は指で興じ、

「まあ、あの子はいつもおかしくて」

と1人でお辞儀をして黒電話をガチャンと切った。
その後の奈美江は、白粉と紅を顔に塗り、茶髪に櫛を入れ、洒落た洋装をしつらえて夜天の中へ仲間達と一緒に外出をした。
木戸健一の父親――奈美江の旦那である――木戸陽一は長期出張中で好き勝手をしていた。
子供部屋の柱時計が秒針がカチカチと打った。濡縁に佇み、寂寞し

た闇夜の風致を眺める。発光する蛍虫が金木犀の横をチラリと動く。

酒田夫人の乳房の事が頭の中を離れない。

季節の終焉であった。

（終　第2話へ続く）

※後書きに「登場人物の紹介」を書いています

第1話　ギルバートの憂鬱（後書き）

木戸健一：主人公。愛称はキッド。宇宙人の子孫で且つ超能力を持つ

木戸奈美江：木戸健一の母親。クラ星出身の宇宙人

木戸陽一：木戸健一の父親。ピカ星出身の宇宙人。

神村哲郎：木戸健一の親友

ピカ星：古代より地球と交信を行う。

クラ星：古代より地球と交信を行う。

光の倭：地球の新興宗教。教祖の正体はピカ星出身の宇宙人

ブルーネイチャー：地球の新興宗教。教祖の正体はクラ星出身の宇宙人

クラピカ戦争：古代の宇宙戦争。選挙制度を持つ自由主義の国家体制であるピカ星と、中央集権制度を維持するクラ星との間で、長期に渡る戦争が続いた。
現在ではピカ星とクラ星の立場が逆転している。クラ星では民衆が蜂起して革命が起きていた。

第2話　一人ぼっちのキャンディ

少し年月が過ぎて木戸健一は１０歳の夏天を迎えていた。
沖縄は日本へ返還されて隣で文化大革命が終結。蒋介石は死亡した。
老けこんだ奈美枝は昼間の洋裁工場の仕事に就いた。
彼女はビートルズに飽きて元タイガースの沢田研二に対して夢中になった。

父親の陽一は出張から帰宅していたが微妙な部分で人格が変化した。
洋裁工場の同僚と一緒に奈美枝は夜の繁華街へ宴会へ出席をする為に出かけた。
健一は父親の陽一と二人きりになった。

麦酒缶で晩酌をした陽一はエタノールの麻醉成分で酩酊、居間の畳の上で暫(しばら)くゴロ寝した後でとび起きて厠(かわや)へ小便をしに行った。
用が済んで渡り廊下の音を立て健一の部屋に入って来た。
起きていた健一は雑誌を読んでいた。

陶器の蚊遣豚から除蟲菊の香が焚かれて芳香が立ちのぼる。
下から見上げると彼の図体の背後に黒い霧。
――いつものお客である。
陽一が陶器の蚊遣豚を片足で蹴り飛ばして緑の畳に粉灰を散布した。
後背(うしろ)を指さして”仏壇のメアリー夫人が云々（うんぬん）……”と、
健一は汲々とした形相で陽一に対して語った。

「ギョッ」と吃驚(おどろ)いた陽一は振り返るが大気は透明であった。
「退散せよ」と陽一の後背(うしろ)へ向けて尖叫した。
「何事だ？貴様は」

憤慨して平手で打ちつけた陽一は陶器の蚊遣豚を掴んで砂壁へ放って叩き壊した。
蚊遣豚の陶器の破片が飛散して頬を翳(かす)めた。
自室へ戻った陽一は黄緑色の蚊帳の中で鼾(いびき)を立てた。
静寂が戻ったので健一は欠伸をした。畳に座して救急箱のヨードホルムで傷の手当てをした。
玄関口の方から引き戸を開ける音。
奈美江が帰宅した。
陽一を起こした奈美江は事情を聞いて跫然と足音を立てて健一の部屋に入った。
「健一、怪我なんかして悪ふざけでもしたんだらう」　と健一へ叱りつけた。
（母親は白髪が増えたものだ）と健一は考えた。
硝子の引き戸の外を眺めると彼方の水銀燈の煌々（こうこう）とした光彩の原因で暗闇は白々と続いていた。

夜風から金木犀の油葉と硝子の風鈴が凛凛(りんりん)と鳴り亘った。
先程、陽一の背後の陰影が、一瞬、薄く変った。
だが、明日も戻るであろう。

翌日の午後、健一は奈美枝と一緒に路線バスで外出した。
夏天は奇峰、南天から水気を含む風が習習と靡く。

ポールの立つ停留所のベンチでバスを待った。
アルミ合金ボディの乗合バスが到着。
空気圧で開口、入口の機械から整理券が出た。

窓際の2列の座席から外を見ると道路の幅員が狭まった。
彼処に入道雲。
市街地を貫いて田舎道に入った。

成長した田圃(たんぼ)に囲まれた停留所で降車すると暗雲から滴り始めた。

九十九折の山道を進み奈美枝と別に透明のビニール傘。
霈然とした雨天の中、混凝土(コンクリート)舗装の路道で水溜りを避けた。
大葉子(オオバコ)が混凝土(コンクリート)を貫く砂利道に入った。
集合墓地の前を通過した。
啾啾とした白黒のタイル壁の四囲は深緑の広葉樹が立ち並ぶ。
花崗岩の碑、単水栓の水道を見つけた。

カーキ色の軍服を身に著けた大柄の旦那が血塗れの姿で此方を見て
何事かを云った。
一一一雨天であるのに拘わらず旦那の着る軍服は乾いていた。

集合墓地を過ぎると木造の寺院の址を通過した。
金色の袈裟を着た和尚が佇んで、健一を向いて（行ってはいけない）と言い出した。

和尚は袈裟のみならず全身、光彩陸離。
寺址はかつて仏像のみならず神道も祭られた。
健一は母の奈美枝を呼んで「大気」を指さした。

奈美枝は「このお寺は江戸時代までだ」と答えた。
山精木魅、であった。

廃仏毀釈を発布した明治政府は仏道と神道の合祀（ごうし）を禁じた。
田舎者ばかり賛美する仏教はむしろ国体の障害の一因であった。
インディアンと黒人が開放されると後の日本は他の植民地に対して存ぜぬ素振り。
地方では田舎者の仏教徒は田舎者同士で固まった。伝統の為に。
だが、物理を知る事の側が本来の伝統を知ることであった。
古代文明の遺跡は科学に拠る手段で成された。

古代科学の精神は他人の家柄に口出しする図々しい田舎の宗教の精神と類似した。
科学者たちは、これ見よがしに古典的な仏教徒の格好を装う僧侶の話を眞面目に聞いた。
科学と仏教の関係ーーーー？
イギリス人が元来好んだアリストテレスの哲学は仏教哲学と類似した。
その内容は2元論であった。

日本社会党はフランス共産党を見捨て、仲間のロシア共産党を見捨てた。

大降りに変ったのでゴム靴は水気が浸透した。
ビニール傘を閉じて鉄筋コンクリートの施設へ奈美江と一緒に入った。
施設の印象は宜しくない。
階段を昇ると踊場の隅に血塗れの男女が悄然とした様子で屈んでいた。

「救急車を呼びましょうか」

声をかけると血塗れの男女は仰天して　「私達の事が判るのですか」
と逆に質問してきた。

彼らに対して　「戦争はもう終わりました」　と答えた。

廊下の突当りの「祈祷室」へ案内された。
板張りの牀畳は埃塗れで、石膏ボードの壁に立つスチールの書棚の中身は黒色の霧靄に包まれた。

鹿革のソファーに腰掛けた祈祷師が待ち受けていた
キャンディという名前の祈祷師は涼しい麻の背広を身に着けていた。

奈美枝はキャンディに対して起立したまま御辞儀をしたが、御辞儀を成し返さずに座したままでキャンディは頷いた。

キャンディは一人のみならず。
青白い形相のキャンディは痩躯であるのに拘らず、黒い袈裟を着た長髪の大柄の旦那を背負っていた。

（何だ、この旦那は）

健一は　（キャンディさんは重たくないかしら！）　と考えた。
すると黒袈裟の旦那と目線が合った。

「キャンディさん。実は」

キャンディに対して、奈美江は息子の健一について「……」と勝手な話を始めた。

鹿皮のソファを起立したキャンディは部屋を出て後、すぐに戻り、桃色と紫色の柄の袈裟に著替え直して来た。

キャンディは健一の周囲を円を描いて走り、尖叫した。
その声は自宅の仏壇で聴こえた【××××】と似ていた。

キャンディの嬌声のみならず、キャンディが背負う黒袈裟の旦那の口も同時に開いて、デュエットしていた。
健一はピンクレディーという歌手を想起した。
２人組で歌って踊る人気歌手である。
健一がピンクレディーを想起したと同時に、キャンディの背後の旦那は、首を伸張させて健一の眼前に顔を突き出し、「カルメーンカルメーン」と唱歌した。
次に黒袈裟の旦那は、手の腹を後頭部に回して拳を握り、次に開く動作を取って「ユーフォー」と唱歌した。「ＵＦＯ」というレコードがまだ発売されていなかった。

儀式は１時間も続いた。
祈祷室の壁の四角の擦り窓の外から、平屋根の天井から、土砂降りの雨音が叩いた。

キャンディと背後の黒袈裟の旦那の周辺にもう一人、メアリー夫人が飛び跳ねる姿を認めた。
このメアリー夫人は自宅の仏壇から飛び出てくる白人女性と同一人物であった。

奈美枝が御辞儀をしてお金の封筒を渡した。
奈美枝は「キャンディ先生はいつも1人で仕事して、大変忙しいですね」を労った。

（ええ？ええ？キャンディさん。貴方は1人じゃなかったよ？）

海市蜃楼、というわけであった。

雨過天晴。
天陽は路道から照射した。

一緒にバス停へ向かって砂利道を逍遥とすると行きがかりに見かけた寺址。
あの時の寺址と違って金薄の群生した面積が更に拡大して、蔓草は更に茂り、蛙が唱歌していた。

（終　第3話へ続く）

第3話　宇宙より愛をこめて

――革命の指導者たちに対して判決が下されて改革開放の時代に変った。
ビートルズのジョン・レノンは射殺された。
学校の女学生たちは渋谷の竹の子族の仲間に入る事を願い始めて独自に漢字を組合せて当て字を開発した。
かつては魯迅たちが外來語（日本語）から中国語の再生を試みた。

校庭の芝草が生い茂る真砂土に書かれたカルシウムの白線は秋雨で霞(かす)んでいだ。

中学校に進学した木戸健一はクラスメートの神村哲郎と共に軟式球でキャッチボールを興じた。彼とはＹＭＯのテクノ音楽で話題が一致した。
音楽室から玲瓏として吹奏楽部の練習の音が聞こえた。
アナログのシンセサイザーが音楽室に置いてある。
音楽界は急激な変化を迎えていた。シンセサイザーの音色と音高はダイヤルとスライダーで調節できる。
音楽室のクロム黒板に木戸健一と神村の名前で相合傘がチョークで書かれてあった。
女学生たちの仕業であった。
男同士であるのに拘らず。
互いに所有するレコードを貸し借りしてカセットテープに録音するそれだけの交流であった。

父親である木戸陽一は革命団体の活動の為に勤務先へ長期休暇を届

け出して長野県へ登山に出発したきりで帰宅しない。

革命団体「光の倭」の教祖は入信させた信徒たちへ演説して現与党である社会党政権の転覆と天皇制の復古を説いて民衆の蜂起を促していた。

父親である木戸陽一は「光の倭」の熱心な活動員である
それとは違って母親である奈美江が入信している団体「ブルーネイチャー」は「光の倭」の教義に対して常に教団の雑誌で批判を続けていた。それ故に夫婦喧嘩が絶えなかった。

低気圧が台風に変って接近、偏西風で方向を変えた。
午後になると強風に変って大雨が降り始めた。

座椅子にもたれて天気予報を見ていた奈美江は健一に対して雨戸の戸締まりを依頼した。

今回の台風は大きいようである。

外に廻って雨戸を立てた。
竹竿は転倒、屋根瓦やトタンが投げられて道路に散逸した。
濡れ鼠の体になって家に入ると照明が消えていた。

奈美江が先程まで寛いでいた座椅子は押入れの中に収まっていた。
何処に出かけたのか。透明のビニール合羽を羽織(はお)って外出した。

近所にある銭湯の近場に流れる放水路を見に行った。

洶湧として水嵩を増した濁流は渦が出来ていた。
何の障害物であろうか。
夜中に暴風域に入ったが奈美江は戻ってこなかった。

翌日の警察署から連絡の内容は、昨日の放水路で奈美江が溺死した件である。

奈美江の亡骸と一緒に革鞄に入った白骨死体も放水路から上がった。
死後１０年程度、経過していた。
革鞄の中の亡骸は偶然にも奈美江の友人で行方不明であった江藤洋子の屍体であった。

奈美江の友人であった江藤洋子は旧同和地域の出身であった。奈美江の口から直接、江藤洋子の話題を伺う経験は無いが父親の陽一が色々と教えてくれていた。

警部補から江藤洋子の写真を受け取った。

写真に映る女性は、自宅から銭湯へ通う夜道の途中で、健一が子供の頃に頻繁に見かけた女性と風貌がよく似ていた。
目線が合うと彼女は健一に対して御辞儀をしたが母親の奈美江は彼女を無視していた。

（奈美江は江藤洋子から誘われたのだ）

考えたと同時に家中の螢光燈が点滅した。

台風が通過すると通夜、そして葬式を迎えた。
陽光の熱気は水分から吸熱されて爽涼な澄天の大気である。
町中はトタン板や瓦、枝葉が散逸していた。

喪服を著て数珠を片手に集結した親族たちの会同が始まった。
家中の諸所に白黒のストライプの布が掛けられた。
祭壇の上には仏像とマリヤ像が共に置かれている。
パイプ組みの天幕の中の長机で受付をした健一が故人の件で親族と言合いをする喧嘩の沙汰の場面もあった。

鉄筒から黒煙が昇天した。

神父の葬式の場で悪臭が蔓延した場面がドストエフスキーの有名な小説にあった。
ドストエフスキーの小説には「ショーペンハウエルかぶれ」の様な自称ニヒリストが頻繁に登場する。
ショーペンハウアーが生前に好んだと云われる仏教の僧侶ついて騎馬民族のような野暮な人物を自称ニヒリストたちは考えていた。
逆に我が国において西洋人の文化について「行儀が悪い」との印象がある。
イギリス人も同じ事を考えていた。

マイクロバスで帰宅すると親戚が祭壇に置いた林檎が甘いエチレンを漂わせている。

奈美江と江藤洋子が旧制学校へ通っていた頃の写真を親戚が渡して

くれていた。

セピアの写真は木造校舎を背景にモンペを穿いて親しげに並んでいる風景であった。

旧制学校の木造校舎は健一が生まれてくる前に鉄筋コンクリートへ改築されていた。

中国には　「犯罪者へ供養を捧ぐべからず」という風習があり、西洋では　「自殺者へ供養を捧ぐべからず」という風習があった。

以前の健一は常に孤独である奈美江の味方であった。

学生服を着た級友である神村哲郎が給食の麺麭(パン)を持って遊びに来た。

仏間で焼香した神村に対して「自殺者へ葬儀を成すべからず」　と、語った。

「キッド、どういう事なのだ？アンタは脛かじりの身の分際で自分の親父さんを家から追い出したと言うじゃないか」

「……」

「木戸陽一さんは立派な人である」

「黙れッ」

殴りかかる拳骨を手の腹で受けた神村哲郎は健一の胸元を掴んで体躯を砂壁へ突き飛ばした。

騒ぎが収まった後で座布団と急須と湯のみ、親戚がくれた菓子を神村哲郎へ勧めた。ソーダ窓から眺める金木犀の翠葉は橙色の芳花が咲き乱れる時分である。座布団に座した神村哲郎はポケットから煙草を取り出してオイルライターで点火して健一にも1本勧めた。

「一体、如何いう事なのだ？」

と、神村は、また質問してきた。

――北西の朔風が凜凜（りんりん）と吹きつける時期に変って健一は神村哲郎を自宅へ招いた。

屋外の雪華が散ら散らと舞う風致は恰（あたか）も銀河の如し。

吐く息は凍りついて、木戸健一は綿ジャージのポケットの中に手を入れている。

「おいキッド。ベンジンの白金カイロなんてもう古いのだ」

神村哲郎の外套は使い捨てカイロが入っている。

健一と比較して神村哲郎は身嗜みに気配りをして洒落た服装を装う性分である。

反射ストーブの上で黄銅の大きな薬缶が熱されて口から吹き零れる。

――神村哲郎に対して重要な秘密を告白した。

木戸健一の一家が実は宇宙人である事実である。
神村哲郎が本気にしたか如何かは判らない。
雪天が止んで二人で夜天の屋外に出た。
自動車がハロゲンライトで路道を金色に映じて徐行していた。
昼間に作った白い雪だるまが銀色のステンレスのバケツを被り、月光の明かりで煌々と映じた。
天空の雲海が裂けて丸い円盤が現れた。円盤は点滅しながら高速で飛転して移動している。
「おお、宇宙人であるという話は本当だったんだな」

雪塊の上に物置の煉瓦を竝べて仏壇をその上に載せた。
燈油をかけてライターを擦って点火した。
焔焔とした赤色の光が沈黙する二人の顔面を映じた。
神村がその焔で煙草に点火した。
焔火が金木犀の白い枝へ飛散した。
宇宙人の仲間である奈美江が大事にしていた樹木であった。
舗道の夜霧の彼方から父親である木戸陽一が微笑みながら手を振っていた。
息子の健一から家を追い出されていた父親の陽一は和解の手紙で呼

び戻された。
実は宇宙人である木戸陽一が入信している宗教団体「光の倭」の教祖も同じく宇宙人であり、ピカ星の出身である。
ピカ星と我が国の間では古代から交信が行われていた。
現在は社会党が与党である嘆かわしき我が国の状況に対してピカ星の住民たちは関心を持っているそうである。

酒を断った木戸陽一はいよいよ我が国の社会党政権の転覆の為に革命に対して本腰を入れる決意をした。

酒田夫人が宇宙人である木戸陽一へ挨拶をする為に勝手口を訪ねて来た。
昨晩はずっと神村哲郎と一緒に麦酒缶を飲み続けていた。
健一の体にはアセトアルデビドが残っていた。
酒に強い酒田夫人は昨夜の件について詰問した。
「お宅の家が騒々しいから家を覗いたの。健一くんはお友達と一緒だったでしょ？2人ですごい大騒ぎしていたでしょ。」
2人で大騒ぎした記憶はない。夜だから、ずっと沈黙していたはず。
目を丸くして嬉しそうに「よくわかるもんだね」と手をたたいて感心した酒田夫人は帰宅した。

木戸健一は酒田夫人を愛していた。
年の差があろうとも自分が宇宙人の身であろうとも、障害を越える愛というものは素晴らしい事なのである。

自宅へ戻って健一は仏間を確認した。
眞鍮の仏壇が元にあった場所は未だ、黒い霞霧が螺旋の渦を巻いていた。
正座して瞑想すると自分の知らない言葉が口から出てきた。
俄然に黒い霧も拡散して消失した。
突如、家の中は明るくなった。
テレビの電源を入れると緊急ニュースが始まった。

《緊急ニュース。アイルランド放送より生中継です》
《本日、ダブリン市の上空で大量の未確認飛行物体が確認されました》

アイルランド遺跡の石塊がテレビに映る。

箒で家屋の掃除を始めた。
――思えば奈美枝はずぼらな女性だった。
宇宙人なのだから致仕方がない。
テレビの電源を消してビートルズのレコードを聴きながら庭箒で掃除をし始めた。

酒田夫人は奈美江について友人へ語った。

「私は木戸さんとこの死んだ奈美江さんの小さな頃の話を知ってるんだよ。ヒステリーじゃなくて良い子でカンの鋭い子だったよ。でも宗教のせいですぐおかしくなったってさ。私、木戸さんとこの子供に悪いだけの母親じゃないって教えてあげたいの。でも、仏壇を焼いたって言ってから、奈美江さんを忘れるのが先だと思うわ。どうかしら？」

そういう理由で、木戸健一は大人になるまで周囲に奈美江についてバカ女であると吹聴して回った。

（終）

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8455k/

EBE-KID(旧題：日本の仏教弾圧)

2011年10月3日03時57分発行